

学力向上だより “継続と徹底”

第106号 R6.6.27(木)

佐賀県教育委員会事務局学校教育課

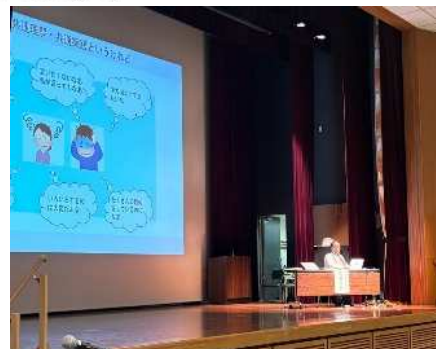


学力向上対策コーディネーター研修会(5/10, 5/13)ダイジェスト

「今年度、あなたの学校ではどのような学力向上の取組を行いますか。」

この問いに具体的に答えることができる先生が多い学校は高い教育効果を発揮することでしょう。学力向上の鍵は、前年度の成果指標や児童生徒の実態から、全職員で成果や課題を共通理解し、具体的な取組を共通実践できるかどうかにかかっています。

東部地区、西部地区の2地区で開催された学力向上対策コーディネーター研修会では、各校のコーディネーターの先生方が、どのような実践に取り組んでいるのか、またどのように共通理解や共通実践を図っているのかについて、熱心に意見交換を行いました。

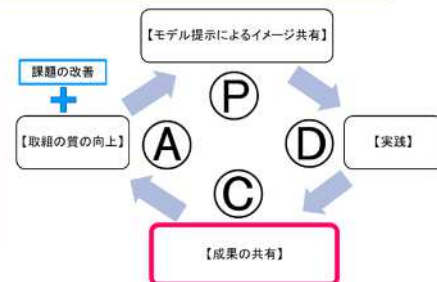


【実践発表の様子】

実践発表 福田栄吉先生(東部教育事務所) 平川綾子先生(牧島小)

「『成果』に着目した仕組化」

- ・今ある振り返り(調査結果、学校運営反省、学校評価、保護者アンケート)を活用する。
- ・1年間のサイクルの中で小さな検証改善を行う。
「今いるひと 今あるもの 今あること」を大切にしたい取組を



「チーム力を高める」

- ・学校教育目標と学校評価を学力向上の取組と評価にリンクさせる。
 - ・*SWOT分析で学校の強みや課題を把握する。
 - ・分析や取組を全職員で協議する場を設定することでチーム力を強化する。
- *内部環境、外部環境について、4つの要素(Strength 強み、Weakness 弱み、Opportunity 機会、Threat 脅威)で分析する手法

一貫性 継続性 簡易性



参加者アンケートより

- ・成果指標は、学校評価アンケートとも連動していくとわかりやすい。全職員が意識するきっかけになる。
- ・校内研究との兼ね合いをはかり、子どもたちのためにできることを確実にしていくこと。一人で抱え込まずにチームで対応していくこと。
- ・一貫性、継続性、簡易性が大事だということがわかった。新しく何かを始めるのではなく、これまでの取り組みに対し、職員に自信をもたせたり、必要に応じて改善したりしていこうと思った。



【グループ協議の様子】



6月3日、中学校英語担当教師研修会が行われました。そこでは、「R5 年度英語教育実施状況調査」の結果から見える現状と今後の取組について、中学校英語科の先生方と共通理解を図りました。また、令和6年度英語教育改善プランの目標についても確認しました。

【小学校】

目標

授業における児童の英語による言語活動の充実を図る。

○授業中、50％以上の時間、言語活動を行っている学校の割合（R5：85.0％⇒R6：95.0％）

児童の「コミュニケーションを図る素地や基礎となる資質・能力」を育成する。

【中学校】

目標

授業における生徒の英語による言語活動の充実を図る。

○授業中、50％以上の時間、言語活動を行っている学校の割合（R5：59.5％⇒R6：80.0％）

生徒の「コミュニケーションを図る資質・能力」を高める。

○CEFR A1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合（R5：30.1％⇒R6：50.0％）

生徒の英語力には、「生徒の英語による言語活動」が影響すると言われています。授業の中で、生徒がコミュニケーションを行う目的、場面、状況に応じて聞いたり、読んだり、話したり、書いたりする活動が増えれば、生徒の英語力が向上していくということです。さらに、「英語を使う言語活動を行っている学校ほど、英語が好きと回答している割合が高い（平成31年度全国学力・学習状況調査 結果概要）」という結果も出ています。日々の授業において、言語活動の量的、質的な改善を視点に取り組んでいければ生徒の英語力向上につながっていくと考えます。

○「言語活動」

知識及び技能を活用し、思考力、判断力、表現力等を育成するために取り組ませるもの

理解の領域（「聞くこと」「読むこと」）

コミュニケーションを行う目的・場面・状況などに応じて、聞き取ったり読み取ったりすること（必要な情報や概要、要点）を捉えさせる活動

表現の領域（「話すこと（発表）」「話すこと（やり取り）」「書くこと」）

コミュニケーションを行う目的・場面・状況などに応じて、考えなどを形成し（表現内容を持ち）表現させる活動

表現の領域において言語活動を行うときは、その前に型や言語材料を示すことが大切です。

※「全国の実践から学ぶ 中学校英語教育35のポイント」を基に作成



【言語活動】

【グループ協議の様子】

また、生徒の英語力を適切に評価するために、佐賀県英語デジタル教材「SAGA e スタディ」の活用を紹介しました。CEFR A1レベル相当以上（英検3級相当）の英語力を有すると思われる生徒の判断にもご活用いただけます。



問題選択画面



結果画面

（例）英検3級レベルの問題で、23問中13～15問以上（60％～65％程度）が正答である。